

故ラウニ・キルデ博士発言集

ラウニ＝リーナ・キルデの経歴

以下の記述は、世界紳士録、科学・工業版紳士録、医学・医療版紳士録からの抜粋である。

公衆衛生、熱帯医学医師で社会活動家でもある。1939年11月15日フィンランド生まれ。1991年からはノルウェーに住み、2015年2月8日、フィンランドで逝去。

1964年、フィンランド、トゥルク大学を卒業し、1964年に医学士、1967年に医学博士を取得した。1970年、ストックホルムのカロリンスカ研究所にて熱帯医学の学位を得た。1972年、スウェーデンの北欧公衆衛生大学院にて社会医学の資格を取得した。1974年、フィンランドにて公衆衛生(国家衛生局)の学位を取得。1980年、保健行政の学位を取得。1969年から1975年まで、トゥルクの大学病院とサロの地域病院においてインターンおよびレジデントを経験し、様々な病院で医療スタッフとなる。1970年から1972年までペルコセニエミ-サブコスキ病院で主任内科医を務めた。1968年、パキスタン、ラホーレのユナイテッド・クリスチャン病院にて内科医。1978年、フィンランドにて環境衛生および保険教育の事務局長代行。1975年から1987年までラップランドで最高医務責任者。1979年、マレーシア及びインドネシアの国際赤十字において最高医務顧問。1978年から1979年、スイス、ジュネーブの世界保健機関熱帯医学部局へフィンランド政府首席代表として参加。1981年から1984年まで、北欧理事会、北極医療研究委員会委員。1983年、米国コネティカット州の臨死研究国際協会諮問委員会委員。1982年、米国カリフォルニア州の接近遭遇臨床治療アカデミー副会長。著書「死は存在しない」が国際的ベストセラーになる。1983年、文学賞受賞。

1975年から1987年までラップランドの安全保障理事会委員。1976年から1977年までラップランドのヨットクラブ会長。1965年から1979年までラップランド赤十字委員会委員。1976年から1987年までラップランド看護大学学長。1979年から1981年までフィンランド国立衛生委員会の旅費奨学金を受領。1992年国連超心理学会が記念メダルを授与。1983年、米国精神研究学会会員。1981年から1986年まで、ラップランド超心理学協会を設立そして会長を務める。2001年から、同協会名誉会長。1992年から1994年まで、ニューヨーク科学アカデミー会員。6か国語を話す。1999年、米国の団体CAHRA(人権侵害に反対する市民)から名誉学位授与される。2013年から逝去する2015年まで、フィンランド医師会会員。EUCACH(姿なき嫌がらせに反対するEU連合)委員会委員。

CIA をコントロールせよ～ニューヨーク・タイムズ紙より

1977年8月5日、ニューヨーク・タイムズは、CIAが確立したなかで最も慎重に扱うべき重大なプロジェクトに関して3度目の論説を発表した。このプロジェクトは、以前の記事で暴露したものである。1977年の暑い夏の数か月の間に、ニューヨーク・タイムズは30本の暴露記事でCIAに異議を申し立てた。3本の論説のうちの最後は、「人々の行動ではなく、CIAをコントロールせよ」という表題がつけられた。他の記事と同様に、この論説でもCIAが24年間取り組んできたブレイン・プロジェクトを取り上げ、マインドコントロールによる危険性を警告した。論説の冒頭で、「したがって、CIAから漏れ聞こえてくる怖い話の中に、不快な医療実験も追加しなければならない」と述べ、CIAが人間の行動をコントロールしようと必死なのは隠しようがないとも指摘した。マインドコントロールの脅威は始まったばかりという認識ではなく、「1957年には、CIAの捜査局長官は、活動のいくつかは職業倫理に反しており、場合によっては法律すれすれのものもある」との証言がある。1953年からマインドコントロールした暗殺者の育成計画が始まった。「たとえば、ひとつの目的は個人がCIAの命令に従うよう仕向けることであり、それは自己防衛本能という基本的な自然法則を無視することさえあった。わたしたちは、倫理について十分に学んでいなかったため、この計画が殺人とどのように違うのかわからなかった。」

結論として、ニューヨーク・タイムズは、責任の所在を明らかにし、政府が被害者に対して治療と補償を提供するよう提案した。「CIAと政府はすべての被害者を追跡し治療と補償を受けさせなければならない。また、議会は、“諜報”という名のもとで認められている行為の将来的悪用に対する予防措置という難問に向き合わねばならない。」予防措置がいまだに導入されていないのは、ブレイン・プロジェクトが、米国の政治的機密事項であり、自国民に対して実施しているだけでなく、外国の市民に対しても行っているからである。この記事の三日前、ニューヨーク・タイムズはあるCIAの文書を次のように引用した。「ブレイン・プロジェクトを敵の軍隊に漏らさないようだけでなく、米国の一般市民から隠ぺいするためにも予防措置を取らなくてはならない。もし情報漏えいがあれば、政治にも外交にも深刻な影響を及ぼし、CIAの任務遂行に支障をきたすであろう。」論説では、「政府内に諜報機関を説明するいかなる正式な組織を設立するとしても、すべての活動に対する倫理的、法的責任を個人として組織幹部に取らせる代替機関はない。誰がそしてどのようにブレイン・プロジェクトを規制するか国は知らされるべきである」と結論付けている。かなりの年月が過ぎたかもしれないが、ブレイン・プロジェクトはさらに広範に拡大している。1997年ジョン・グレン上院議員は、ブレイン・プロジェクトは現在最も非米国的問題であると述べた。彼は、米国の医薬品はブレイン・チップを含んでおり、それによって人間はスーパーコンピュータと接続され、医療研究、脳実験、行動操作、マインドコントロールが行われていると暴露した。このテーマは一般的に議論される必要がある。このプロ

プロジェクトはこれまで政治的産物として開発されたもののうち最も非人間的であり、すべての市民を対象とするよう意図されている。

EUのブレイン・プロジェクト

行動科学テクノロジーを用いたブレインプログラムが始まってからの50年で、多くの反対意見が出された。しかし、その詳細はマスメディアでいまだ公表されていない。2,3年前、欧州委員会倫理委員会(スウェーデンの教授ゴラン・ハーメレンが議長)は、優れた反対意見を提出した。彼らは2005年3月16日に「人体へのICTインプラントの倫理的諸相」(ICTとは情報通信技術のことで、医療機関がインプラントする電極からバイオチップまでのすべてを指す)。この宣言書では、行動操作や脳実験、人間のコントロールに関する医療研究において人間を不正利用していると述べている。倫理委員会は、上記のインプラントが我々の脳に埋め込まれた場合、軍隊が社会や民主主義、人間の自立に対してどのような脅威となるか疑問を呈し、意図された範囲がどのようなものか説明している。「ブレイン・コンピュータ・インターフェースつまり直接的脳コントロールによって、脳から情報が抜き取られ外在化される。もし、そのようなインプラントが我々の脳に埋め込まれたら、人間の自主性にとってどれほどの脅威となりうるであろう？」

この宣言書では、「ICTインプラントは個人やグループにとってどの程度まで社会の脅威となり得るか？」と疑問を提示している。「特別な注意が必要なインプラント」という題で、「神経系、特に脳に影響するICTインプラントは、種としての人間のアイデンティティに影響を与えると同時に、個人の主体性や自律性にも影響する。」と倫理委員会は述べた。また、ICTインプラントが人間としての性質を変えるという決定的な問題を次のように提起した。「現代社会は、人間の人類学的本質に関係する変化に直面している」。インプラントが埋め込まれ自由意志がなくなれば我々は絶滅するのだろうかという問題も提起した。「もし、人間の体の一部(特に脳)がICTインプラントに取って代わられたり、補完されたりした場合、人間は人間であることをやめることになるのであろうか？」ICTインプラントプロジェクトは、地球上で開発されたものの中で最も全体主義的なプロジェクトである。

2,3年前、英国の雑誌「エコノミスト」は「マインド・コントロールの未来」という記事の中で、脳科学者や管理されていない彼らのプロジェクトは、人間性にとっての最大の脅威であると論じた。「人々は遺伝学に懸念を感じている。また、脳科学についても懸念を抱くはずだ。しかし、神経科学のことになると、政府も条約も何一つ禁止できない。可能性を無視しても、可能性がなくなるわけではない。もし、どの分野の科学者に責任がある可能性が高いかと尋ねられれば、人間性の本質的な性質を考慮して、ほとんどの人は遺伝学者と答えるであろう。しかし、実際は神経科学の方がより大きな脅威であり、また身近な脅威である。」思考、認識、脳機能がもはや我々自身のものでないなら、我々は人間

の本質から離れて、国や権力者にとっての一種の生物学的要素にすぎないのである。「人間の意思を遠隔的にコントロールするために ICT インプラントを使用することは厳しく禁止せねばならない。」

スウェーデンの防衛研究機関は、彼らのプログラムの中で、目的が人々の認知機能を生涯にわたってコントロールすることであると宣言している。ニューヨーク・タイムズは、マインド・コントロールの脅威について 3 本の政治的論説を公表し、この問題を市民が議論するよう求めた。このような論説は、ほとんどの人が聞いたことのないようなものだった。3 本目の論説「人々の行動ではなく、CIA をコントロールせよ」では、CIA のような国の機関が、その行動の責任をとることの必要性を訴えている。欧州委員会は、次のように明言している。「ある人々に制限のない自由を与えることは、他の人々の健康や安全を危険にさらすかもしれない。人体に ICT インプラントを使用する自由を与えれば、潜在的に社会への悪影響が生じるであろう。」人体 ICT インプラントは、人種差別やあらゆる形の全体主義的施策を超える国家プロジェクトである。これは、共食的な要素を含んでおり、市民と社会の両方を変質させるよう考えられている。つまり、この人体 ICT インプラント計画は、国家の防衛機関や公安警察が大規模に市民を利用するもので、欧州委員会に責任がある国家的計画である。欧州倫理委員会は、幅広い議論の必要性と我々の心や生活に対する脅威を緩和する必要性を主張した。

あなたの脳は覗かれている

「情報社会」というテーマは今日の社会的、政治的問題のなかで最も重要かもしれないが、ほとんどの人は「情報社会」についての知識を持たない。「情報社会」と呼ばれるものには全く異なる二つの社会モデルが存在する。現在の方向性は管理国家的社会モデルである。つまり、専門家、ブレインチップ、行動修正、大企業、国家機関などが原動力として含まれている。一方、もうひとつの社会モデルは、人々の幸福、平等、自由に基づいている。EU 倫理審議会が「開発指向型情報社会」のために求めていることは、協力と人権の推進である。「インフォピア」という書物の中で次のように述べられている。「第一の情報社会は、物質の普及、ロボット管理、専門家、中心化に基礎を置き、標準と動力の増加が重要な原動力であった。発展過程では、競争が必要であるという価値観が顕著である。第二の情報社会は、究極的なかたちとしては人間を解放する。「ロボット管理が意味する内容は広範囲にわたっており、ブレインシステムと市民との接続をとらなう。このようにして、人間は同意を得ないバイオメディカル研究(特に行動修正に関する場合)に利用されるのである。そのような社会では、人間は単なる家畜か生物学的要素でしかない。米国の教授カール・ロジャースは「サイエンス」で述べたことを引用した。「…そして、このことからわかるのは、大多数はいかに仰々しい名前と呼ばれようとも単なる奴隷ということである。我々は増え続ける知識を用いて、以前では想像もしなかった方法で人

間を奴隷化することができる。つまり、人格の喪失に人々が気づかないよう注意深く選んだ方法で、人間の個性を奪いコントロールするのである。」カール・ロジャースは、人々の同意や理解なしに人間の脳と国家のスーパーコンピュータがやりとりさせられている、と説明している。

「情報社会」という言葉を提唱した日本の増田米二教授は、「情報社会」という著書の中で、専門家が独占する情報社会は伝統的な独裁制と比較してもよりひどい人権侵害を引き起こすであろうと述べた。新しいサイバネティクス革命は、スーパーコンピュータや人間の中樞神経系の遠隔制御によって方向づけられている。つまり、良くも悪くも誰がこのシステムを最終的に牛耳るかによって方向が決定づけられる——市民か国家かである。このシステムを運用する主体によって、素晴らしい夢になったり、ひどい悪夢になったりする。増田博士は積極的な応用の可能性にも言及している。「誰もが健康で創造的、そして行動的な人生を平均年齢 90 歳以上になるまで送れるようになる。」英国のマルコム・バーナー教授は、専門家が支配する情報社会は封建制度の復活を招くと述べ、1930 年代の先人より深刻な結果を引き起こすかもしれないと懸念を表明した。市民の虐待や搾取を行っては何の進歩も訪れない。現在の情報社会は人間味のある文明と全く正反対である。

「インフォピア」の著者であるリーフ・ドラノボ氏が述べたように、二つの情報社会は次の点で異なっている。「技術にしてもその使用にしても中立ということはない。コンピュータピアとロボット国家は全く正反対の情報社会である。一方は明るく、他方は暗い。もし、コンピュータピアを選択すれば、我々は制限のない可能性に満ちた社会への扉を開くことになるだろうし、ロボット国家を選択すれば、我々の社会は耐えがたいほどひどいものとなるだろう、と増田教授は述べている。」ブレインシステムに組み込まれることを誰も容易には承諾しないので、国家主導の情報社会は市民が気づかないように発展してきた。国家主導の情報社会は、軍部や防衛研究を秘密にしつつ形成されており、計画を暴露する危険性のある人物を黙らせるために伝統的な手法が用いられている。

EU 倫理審議会は、「人体への ICT インプラントの倫理的諸相」という宣言書を公表し、ブレイン・チップのインプラントとテクノロジーを用いた行動コントロールに反対を表明している。その中で、「欧州委員会倫理委員会は、情報社会に関する世界サミットの宣言で公表されているように、個人主体で開発指向の情報社会の展望を強く支持する」と記されている。我々は岐路に立っている。選択した結果は、人間の歴史上なされてきた数々の重要な戦争と同じくらいの重要性を持つ。

マインドコントローラー ラウニ キルデ博士
(ニューヨークタイムズ)

1977年7月にニューヨーク・タイムズ紙は、CIAプロジェクトのマインドコントロール計画を暴露した際、“秘密機関”のディレクター、スタンスフィールドターナー氏は、上院の公聴会で証言しなければなりません。1977年8月3日に、彼は“CIA”に確立されたネットワークのアカウントを公表しました。その中には、80箇所もの医学大学、病院、刑務所、そして、185人もの(米国の)優秀な科学者、研究者、医者などが含まれていました。そこには、この“マインドコントロールプログラム”がCIAのディレクターのアレンダレス氏によって、1953年に始まったと記述されていました。

これから記載する事は、教授ジョンC. リリー教授が、“サイエンティスト”という、彼の回顧録に記載されていた内容です。彼は1953年に、CIAのディレクターに、“CIA”に加入して、これらのプログラム実験に参加しないか提案されたと記述されています。しかし、彼はそれを“拒否”し、その理由についてもこの本に記述されていました。アントワヌR. リモンド博士は、パリで我々の技術を使用して、神経外科医(彼が運営している診療所でやっていること)の助けなしに、人間の脳へ刺激を送る事は可能であることを示しました。これは、適切な装置さえあれば、誰でも密かに一個人に対して、なんの(電氣的)痕跡も残さずに、これを行うことができることを意味します。私は、この技術は“秘密諜報機関”の手にいった場合、彼らは人間を完全にコントロールすることも出来るし、彼らの(人間の)信念を即座に変更することができるかもしれないと考えています。今日の注射注入型バイオチップ(インプラント)は、世界中の病院で利用されています。問題は、それらの使用状況の増加が、さらに“秘密と陰謀”によって増強され、闇と沈黙に包まれている所にあります。

1977年の夏の間、ニューヨーク・タイムズは、CIAとマインドコントロールについての30ページの記事を発刊しました。しかし10年も前に、彼らはすでに“ボタン操り人間の脅威”との見出しの元に、“公開討論を要求する”最初の社説を発表しています。1967年4月10日、(政府機関がマインドコントロールに関わっている可能性を示唆した上で)、彼らのマインドコントロールに関しての最初の社説によると:いくつかの国ではすでに、これらの人間を制御(コントロール)するための技術を悪用する(使用する)可能性を考え、調査や研究が行なわれようとされています。そのような(悪用の)可能性の存在が今後、より広い公衆の議論と大きな注意(注目)が注がれる事になるでしょう。これらの国の中には、イギリス、スウェーデン、アメリカが含まれています。

三年後には、別の社説が掲載されました。1970年9月19日、マインドコントロールによってもたらされる危険性について、ニューヨークタイムズの社説、題名「脳波」では、次の点を記述しました:“もしジョージ・オーウェル氏(作家)が、「1984」(本の題名)の続編を書いていたら、:彼はこの“話題”を恐らく”人々の心を制御するためのプロパガンダ”手法

(政府的宣伝手法)として扱い、本に描く事でしょう。また、“生まれたばかりの赤ちゃんの最初の経験は、脳神経外科である社会を構想するかもしれません。”と格かもしれません。子供の脳に小型化された無線装置を手術で装着し、理性と感情の操作をしている脳機能の主要なすべての“中央管理システム”に接続する。(彼らは、)何が起こっていたかを知っていたが、この問題に関する公開討論をもたらすことには失敗していました。25年後、米国上院議員ジョン・グレン氏は、乱用を規制しようと、上院での演説でこう述べました：“私は、政府がもはや”個人に対する未承認の人体実験”を行なわないことを、私の住んでいるオハイオ州の州民、および全国民に”保証”出来るように出来ればよいと思っています。”欧州の状況も同じであり、EUの(生命)倫理委員会でもマインドコントロールに対しての宣言を発表しました。2005年に彼らはこう書きました：“どこまで私たちは、このようなデバイスを、または、これらのデバイスを使用している人々に対して、制御(規制)の対象とすべきでしょうか？”そして以下の文章でおわりました：“加盟国はこの分野で、建設的な議論が行われ、また十分な情報を作成できる条件／状況を作る義務があります。”これは、今日の世界にとっての”最重要課題”であり、マスメディアは、その議論を開くための義務(責任)を負っている。”だから私達全員で、このような報道(行動)のためのサポートをしなければなりません。いずれにせよ、世界の人々は、自分の脳に(状況感知用の)チップと一緒に暮らす生活を選ぶことになることでしょう。。。”

マインドコントロールとは？ ラウニ キルデ博士 ノルウェイ 2014年

一般的に”陰謀説”に関連した用語ですが、実際には50年間にも及ぶ、継続的な機密技術による政治的なプロジェクトです。これは、最初のスーパーコンピュータの開発に平行して、心／脳／態度を制御するための技術(システム)を確立しました。これらは、“サイバネティクス”という新しい科学で、アメリカのノーバート・ウィーナー教授が、1948年に同タイトルの本を出版したとき、初めて公になりました。研究者の”マインドコントロールプロジェクト”は、多くの場合、動作(態度)や認知(感覚)操作に分類されます。当初から、半世紀以上も前に、思考、記憶、及び視覚や聴覚などの感覚機能を傍受することが可能でした。サイバネティクスはまた、(直接)接触して来たものを測定／分析するだけでなく、これらのプロセスに変化を与える事が出来ることを可能にした最初の科学(技術)でした。

しかし、軍が密かにそれらを独占し、開発をしてきました。彼らはイノベーター(新開拓者)となり、価値を上げ、選別した(優秀な)研究者達をパートナーにつけました。そのオフセット(相殺性)から、この問題についての議論が行なわれました。科学誌”サイエンス”は、「人間行動(態度)の制御に関するいくつかの問題」という見出しの下で、14ペー

ジにおよぶ記事を、1956年11月号に発刊しました。カール ロジャー教授は、私達は、様々な方法で人々が想像もした事がないような、人々を奴隷にする知識(技術)を使用し、選択できるようになります。人々はおそらく、自身の人格の損失を認識することなく、(個々を)慎重に選択し、それらを制御できるようになるでしょう。加えて、民主主義国での政治的悪用の可能性を示唆します:理想(空想)主義者によって、すべての独裁政権の信奉者の中で、これらは最も深遠で、これらの(概念の)中で、(政府活動の)独裁政権のガイドブックを見つけるかもしれない。これは人々を、これは大勢の人々を恐れさせた。米国では本が出版され、一流の人々によって書かれた記事や、その危険性を訴える内容のスピーチが書かれていました。遠隔制御技術を介しての、人間への搾取の脅威が明らかになったのです。アメリカの精神医学の教授、Joost Meerlo氏は、彼の著書「マインド(心)のレイプ」(1956年出版)の中で、こう述べています:私たちの時代の政治(家)経験者の悲劇的な事実は、心理的な技術が全体の国民を洗脳することが可能で、あまりにも明確(確実)だっという事実に気付いている(知っている)事です。また、国民をロボットみたく変貌させ、マインドレス(洗脳)にし、しかもそれが彼らの生活の”当たり前”な感覚(気付かない)になるのです。1968年、精神分析医と社会哲学者のエーリヒ・フロム博士は、彼の著書「希望の革命」を出版し、その中でこのように述べました:”機械化された社会”によって、国民がその”機械の一部”にされるのです。それは、共産主義やファシズムの古い幽霊(社会構想)などではありません。「ニューヨーク・タイムズ」は、”Control CIA Not Behavior ”の社説(1977年5月8日))を公開するまで9年かかり、その後このような意見を公表しました:だから我々は、中央情報局(CIA)から出てくる”ホラーストーリーのリスト”に”非論理的な医学的実験”を追加する必要があります。エージェンシー(CIA)は、かつて人間の行動を制御するために、必死に、追求/研究していたことは明らかになっています。

しかし、行動制御技術とマインドコントロール技術は継続され、特にヨーロッパの国の人々に対しての広範囲な悪用および、インプランテーション(インプラント)は続きました。スウェーデンのヘルメラン教授を会長に、EU(ヨーロッパ連合)の倫理委員会は2005年、EU(ヨーロッパ連合)委員会に抗議し、宣言書を書きました。”アイデンティティ、記憶、自己認識と知覚を変化させる、インプラントの悪用を禁止するべきです。”しかし、スウェーデンの軍事研究(FOI)は、それらの目的は、”一生その人々の認知機能を指示すること”であったと、活動報告書の中で宣言しました。FOIは、人と技術との間の”相互作用”を重視したシステムを開発しています。目標は、”人間の認知の潜在能力”が、(言い換えれば、知覚能力、理解力、情報を選別する能力など)最大の効果で、活用/利用できるシステムをデザイン(設計)することです。マスメディアによって公開されない場合、これらは永久的に、悪夢になることでしょう。このような(技術の)開発は、”公(社会)への公開なし”という条件の下でしか、続けることができないでしょう。ジャーナリスト、社会活動家や賢明な政治家達などは、そしてもちろん全人類も含め、自分の脳内に取り付けられ

た電子チップをしながら生活をし、“羊のように”操られ人生を送りたいとは思わないでしょう。21世紀、我々は人間として、自由と人権によって守られ生きるためには、この技術の公開(広報/認知)をしていくのは我々全員の責任となります。

ペンタゴンのブレイン(脳機能)システム
ラウニ キルデ博士 (2014年)

“脳への遠隔制御装置/兵器”が公に知らされていない理由の一つに、それが“軍事機密”によって守られているからです。それは米国の政治家デニス J.クシニッチが、議会で、“米国の国際的なスーパーコンピュータ制御システム”を規制(法制化)しようとした時に経験したものでした。放射物(電磁波)を使用する、それは世界、誰がどこにどのような関係なく、国(アメリカ)全体、大統領だろうが、街を歩いている人にも影響を与えるものでした。クシニッチ議員は、2001年10月2日に、法案「H.R.2977」を発表し、次のように述べています：“海上”基地、および、“宇宙”基地のベースでの、電磁波装置(兵器)、サイクロニック装置(兵器)、音波、レーザー、またはその他の、個々に向けたエネルギー装置(兵器)、または、国民を対象にした、情報(盗聴/盗撮)戦争、気分(態度)の操作、またはマインドコントロールの目的のために。。。” 脳のプロセス、そしてどんな生物学的機能も、誘導(影響を与える)することができます。これらの目に見えないシステム(電磁波等)で、個々のモデリングから、内戦の勃発まで、何でも操作することができます。しかし、クシニッチの法則提案が、軍によって精査され、それ以上進行させることが出来ませんでした。“軍事機密”と呼ばれている“モノ”は、議会での法案に提示することが出来ませんでした。また人々は、“衛星システム”で、天候を変えたり、収穫(時期)や他の生物学的プロセスを変更するために使用することができるという事実が開示されたという事実と同時に、それらを認識していく必要性があるでしょう。

法案は、「エキゾチックな兵器システム」という概念を含め(認め)、クシニッチ氏は、それらを：“エキゾチックな兵器システム”という用語(概念)は、ある特定の地域や個々の人間に対してや、宇宙や自然のエコシステム、イオン球または上層大気、または気候などの、破壊/損傷を誘発、または目的にする武器を含みます。米国が国家に対して、“目に見えない戦争”に関与しており、地球上のさまざまな地域での破壊をもたらしている事実を知る事は、大きな驚きになることでしょう。これらの破壊のプロセスは、国家の収穫、気候、人々の健康、精神、または気分、または他の因子に、様々な影響を与えることができます。しかし、クシニッチ法案を、強制的に撤回する軍事機密的要因が、さらに明らかになりました。これは、私たちの時代での、一番最初の大きな津波が来た以前の話ですが、クシニッチは地震や津波の両方が“光線兵器”によって生成することができることを述べました。そして、地球の“地殻変動システム”に影響を与えるので、禁止されなければならないことを示唆しました。地球の地殻内のこれらのエコシステムが弱まる事によ

って、最も被害が出るであろう(大きな)地震と(大きな)津波が発生しやすくなるのです。米国、そして他の強豪国は、衛星が最初に打ち上げられるはるか前から、これらのシステムの開発に着手していました。1980年代から米空軍の衛星は、周波数 137、および 138 MHz での地球全体への照射をしています。そしてこれは現在でも昼夜行なわれています。現在はもしかしたら周波数をもっと高い波長に変調されている可能性はありますが、それらは地球上のすべての”人や生命体”が対象で、生成(成長)侵害、洗脳、刺激などが目的です。

米空軍は 1996 年に、「新しい戦争の戦闘能力情報操作」というタイトルを使用して、レポートを公開しました。「ヒューマン・コンピュータ・システム」という概念の下、“脳機能のアプリケーション”が議論されました。それは、“スーパーコンピュータ”と“バイオテクノロジー”の相互作用が、(人体の)所望している情報を、取得することができることを宣言しました。人間とコンピュータのシステム統合(融合)は、科学技術の”最終的な”領域で、重要(主要)な要素(研究)になっています。人間システムとバイオテクノロジーは、“人間とコンピュータとの間の情報”のシームレス(どこまでも続く)なフロー(流れ)を作成する可能性(潜在性)があります。さらに、文書に記載されていることは、それらのコントローラは、地理的な位置に関係なく、“彼の脳”と”他の人々の脳”または”ソース(機能)”に接続することができる」と述べました>(*ブレインネットワーク)これらの技術をマスターすることで、ユーザーは自分の脳に直接入力したい情報を”選択”することができるようになります。すべてこれらは、今まで存在もしなかった最も先進的な”監視システム”を介して行われ、すべての人々の整合性(適合性)とセキュリティを監視しています。“スーパーコンピュータ”は、自分(人)の脳の機能、態度や気分、自身(人々)の(個々の生きる)権利を、超越することが可能です。